中古和文における複合動詞の心情描写
――「ふす」「すべる」「ゐざる」――

岩　瀬　莉　奈

1　はじめに

中古和文語彙においては、従来様々な研究がなされてきたが、中でも特に『源氏物語』は同時代作品に比べて複合語の数が多く、固有の表現も多いことが安藤徹（2008）において指摘されており(1)、文体と語彙（和文体と複合語）との関係においてはさらなる研究の余地を見出せる。そこで、本稿では特に動詞「ふす」に着目し、その複合語を中心に検討したい。中古和文において「ふす」は、以下のような場面で用いられる(2)。

(1) 女君、なほ寝入らねば、琴を、ふしながらまさぐりつつ　（『落窪物語』巻1）

これは少将が姫君を見初め契りを交わす場で、姫君が寝られず箏の琴をうつむいたまま弾いてつらい世を吟じる様子を示しているのだが、「ふす」という動作は女君の嘆きという心情を表すものとして用いられていると考えられるのである。また、「ふす」が複合語化した「ひれふす」や「うつぶす」も同様に、女君の動作としての用例がみられ、さらにこれら三語には、女君が男に侵入されたり密通が起こったりする場面の用例があるという共通点もあるのである(3)。

これらのうち「ひれふす」については、中川正美（2020）「『臥す』人々：日常の文学的形象」が、「女君が男の侵入などの突然の事態に思わず『ひれふす』のは、衝撃にとっさに身体を折って逃れようとする」動作であると述べているが、解釈に疑問が残るため、本稿においては、「ふす」動詞の意味と用法を総合的に検討しつつ個別例の解釈について再考する。現代の「ひれふす」は、「からだを伏せ、頭を地につける。深い謝罪・感謝・祈願などの気持ちを表す」（『学研国語大辞典』）と記述され、心情との繋がりが考えられるが、そのあり方が中古和文における動作と心情との関係からどのように変化したのかという史的側面についても検討する。さらに、特に『源氏物語』において複合語が多く用いられる要因を探るため、「ふす」単独の場合と複合語化した場合での用法差や、同一場面「女君が男に侵入される場」における、別の身体動作「すべる」「ゐざる」の複合語の表現効果を考察したい(4)。

2 「ふす」―自己帰結型

まず、物語における単純語「ふす」の用法を、文脈を重視して捉えてみよう。一般的には「姿勢を低くする、うつぶせになる。横になって休む。」等の意で用いられる[5]が、中古和文の「女君が男に侵入される場」に限定すると、以下のような用例があげられる。

(2)（源氏の宮は、）恐ろしうわびし、と思したるより外事なきに、人近く参れば、絵に紛らはして少し居退きたまふ。顔のけしきもいかがと思せば、立ち退きたまひぬ。宮は、いとあさましきに動かれたまはで、同じさまにてふしたまへるを、大納言の乳母、「などかくは」と見たてまつり驚きて　（『狭衣物語』1巻）[6]

(3) あこぎ、「なほこたみは」と言へども、「いかに思ひ出でたまふらむ」、思ふに、恥づかしうつつましくわびしくて、返事書くべくもおぼえねば、ただ衣をひき被きてふしたり。　（『落窪物語』巻1）

(2) では、男君が立ち去った後「ふし」ているのを乳母に目撃されることで、思いがけない境遇に置かれた女君の自己への嘆きに焦点があたる。(3) の「ふす」女君は、男君への拒否の要因を、みすぼらしい衣服を身に着けていることを知られた自身の恥に向けており、(2) (3) のどちらも「ふす」要因は自己に対する嘆きにある。このように相手に訴えかけるものではなく、自身の置かれた境遇を嘆くものを〈自己帰結型〉と呼ぶこととする。

3 「うつぶす」―他者抵抗型

次に、「ふす」の複合語「うつぶす」の用いられる文脈について検討する。「うつぶす」は一般的に「顔を下に向ける。顔を下にして体を前に倒す。うつむく。」の意で用いられるが[7]、中古和文における「女君が男に侵入される場」に限定すると以下のような用例がある。

(4)「御返事は」と乞へば、「はやう御文も御覧ぜよ。今は思し嘆くともかひあらじ」とて、御文ひろげてたてまつれば、うつぶしながら見たまへば、ただかくのみあり　（『落窪物語』巻1）

(5)人々声づくりきこえて、「雨降りはべりぬべし」など言ふに、姫君、例の、心細くて屈したまへり。絵も見さして、うつぶしておはすれば、いとらうたくて、御髪のいとめでたくこぼれかかりたるをかき撫でて、「ほかなるほどは恋しくやある」とのたまへば、うなづきたまふ。　（『源氏物語』紅葉賀）

(4) の女君の「うつぶす」動作は、自身の惨めで恥ずかしい姿を男君に見られたつらい境遇を嘆くと共に、「うつぶす」ことで男君に応じることを拒否している。また、「うつぶす」姿をあこぎに見せることで手紙の返答に抵抗し、あこぎはそれに応じて「あこぎ返事書く。(略)『御前には、いと悩ましげにて、まだ起きさせたまはざめれば、御文もさながらなむ。いとこそ心苦しけれ、御けしきを見るは』」と、女君の手紙の代筆をしている。(5) は、幼い紫の上が源氏の外出を嫌がって「うつぶす」姿を見せることで抵抗を示し、源氏はそれに応じている。このように、「うつぶす」女君の姿は、見せる相手に抵抗し、相手に言動を改めるよう作用する効果を含むと考えられる。

(6)(源氏は、)「思し疎むなよ」とて、御手をとらへたまへれば、女かやうにもならひたまはざりつるを、いとうたておぼゆれど、おほどかなるさまにてものしたまふ。

柚の香をよそふるからに橘のみさへはかなくなりもこそすれ

むつかしと思ひてうつぶしたまへるさま、いみじうなつかしう、手つきのつぶつぶと肥えたまへる、身なり肌つきのこまやかにうつくしげなるに、なかなかなるもの思ひ添ふ心地したまふて、今日はすこし思ふこと聞こえ知らせたまひける。(『源氏物語』胡蝶)

(6) には、源氏からの恋情に対してうとましさを感じた女君の「うつぶす」姿が描かれている。「新全集」や「新大系」の注釈では「うつぶす」動作が与える効果について特に触れられていないが、ここで、(4) (5) の用法を踏まえると、(6) においても「うつぶす」姿を相手に見せることで源氏に抵抗したのではないかと考えられる。「うつぶす」玉鬘は、「おほどかなるさま」で歌を詠むことで相手への恐怖や不快を抑えて「おっとりとしたふう」に振る舞い、冷静に娘として、源氏に対し自制を訴えたのではないだろうか。このように相手に行動の制止を訴えかけるものを〈他者抵抗型〉と呼ぶことにする。

4 「ひれふす」—他者服従型

4.1 一般的な「ひれふす」の変遷

「ふす」動詞の最後に、「ひれふす」について検討するが、まずは男君と女君の恋の場には限定せず、一般的な用法を確認する[8]。中古には、以下のような用例がある。

(7)(目の前の怪我を負った犬が、実は殺されたはずの翁まろであったと発覚し)

御鏡うち置きて、「さは、翁まろか」と言ふに、ひれ伏して、いみじう鳴く

(『枕草子』「上に候ふ御猫は」7)

（8）実方の侍従、長命君など集りて、「馬に乗りならはせたまへ。乗らせたまはぬはいと悪しきことなり。宮たちはさるべきをりをりは馬にてこそ歩かせたまへ」とて、御厩の御馬召し出でて、御前にて乗せたてまつりて、ささと見騒げば、面いと赤くなりて、馬の背中にひれ伏したまへば、いみじう笑ひののしるを、宰相かたはらいたしと思すに　（『栄花物語』巻1）

(7) は、犬が姿勢を低くして鳴く様子を表すものと考えられるが、ここでの「ひれ伏す」は、翁まろが清少納言の声掛けに対し、まるで人間のように感動したという心情を含む身体的動作として用いられているものと考えられる。(8) は、12歳の永平親王が、無理やり馬に乗せられ笑いものにされて、顔を真っ赤に染めて、馬の背中にしがみついている様子を表す。このように中古では、相手に対し感極まる心や羞恥により、身体を倒す「ひれ伏す」の用法がみられる。中世では以下の用例が挙げられる。

（9）（義経は）太刀脇挟みて、「暇申す」とて出で給へば、女房これや限りの別れなるらんと悲しみて、出で給へる妻戸に衣引き被きひれ伏して、泣くよりほかの事ぞなき　（『義経記』2巻）

(10) 日暮れ、夜明くれども、空しくおくれて、独りは帰るべき心地もなかりければ、七日七夜まで川のはたにひれ臥し、天に叫び地に哭して　（『太平記』34巻）

(9) は、義経を湛海坊との決戦に送り出す女房が、妻戸の所に被衣（かずき）を引きかぶって倒れ伏す様子を示す。ここでは、女房である法眼の姫の、親と夫との板挟みに苦しみながら「親子は一世、夫婦は二世の契り」として結局は義経への愛情を貫く立場の辛さや、厳しい宿命への嘆きが表れている。(10) は、毒蛇によって父に先立たれた娘の曹娥が父の死と自身の境遇を嘆く様子が描かれる。このように、中古より中世と時代を下る方が、宿命への嘆きを強く含む用法が多くみられる(9)。「ひれふす」は心情面に即して言えば「相手の行為や宿命により、自身の置かれた状況を嘆き悲しむ」語といえる。そして、自身に対する「羞恥」「嘆き」といった用法から、近世には以下のような用例がみられる。

(11) なほ万歳を唱へよと高慢我慢の詔。はつと両人陛下にひれ伏し、我々は申すに及ばず、民百姓も野に手を打つて舞ひ楽しむ、誠に戸ざさぬ御代と申すは今この時に候ふと、滅多に追従　（『妹背山婦女庭訓』「御殿の場」44）

(11) は、玄蕃、弥藤次が君の寿を祝い「陛下にひれ伏し」お世辞を述べる様子であり、近世になると現代語に通ずる「敬い畏まって礼をする」意で用いられるようになり、「相手への恭順」や「相手をおだてる」用法への変化がみられる。

4.2 『源氏物語』における「ひれふす」

『源氏物語』に「ひれふす」は6例ある。同時代の他作品においては、恋の場面における用法があまり見られないのに対し、『源氏物語』では恋の場面においてのみ「ひれふす」が用いられ、全て女君の身体表現として用いられている。これは、『源氏物語』における文体的特徴と考えられる。

(12)（源氏は女三宮に）「この人をばいかが見たまふや。かかる人を棄てて、背きはてたまひぬべき世にやありける。あな心憂」とおどろかしきこえたまへば、顔うち赤めておはす。

「誰が世にか種はまきしと人問はばいかが岩根の松はこたへむ

あはれなり」など忍びて聞こえたまふに、御答へもなうて、ひれ臥したまへり。（『源氏物語』柏木）

(13)（源氏は）例のもの深からぬ若人どもの用意教へたまふ。宮は、人気に圧されたまひて、いと小さくをかしげにてひれ臥したまへり。「若君、らうがはしからむ、抱き隠したてまつれ」などのたまふ。（『源氏物語』鈴虫）

(12) は、源氏に、薫の負う出生の秘密の重さを投げかけられた女三宮が、返事もせずうつぶしてしまった様子を指し、源氏の行動によって恐怖の念を抱き、自分ではどうすることも出来ない宿命を憎む女君の姿が描かれている。(13) は、女三宮が、「人が大勢いるのに気圧されていらっしゃって、まことに小さくかわいらしい格好で、うつぶしておいでになる」と訳される。この「ひれ臥す」行為は、注釈に「本来なら主人役として、人々に対応もすべきところ。幼稚な姿。」と指摘される通り、女三宮の未熟な在り方を描いたものと考えられる。このように、『源氏物語』では「ひれふす」動作により、他者からの強い圧力や恐怖を抱えた女君の心情が浮き彫りとなるのである。また、「ひれふす」動作は、積極的に他者へ働きかけるものではなく、未熟な消極的動作として用いられている。

4.3 女君が侵入される特徴的な場における「ひれふす」

さらに、女君が侵入される場における「ひれふす」の用例を取り上げる。

(14)「……さてもさても、などか、入り来たりつらん折、声高やかに、うち泣きたまはざらまし。心安くひれ臥したまひつらんよ。あな心憂、あな恥づかし」と、額髪も引き上げて、ややもせば、食ひかきつべし。（『狭衣物語』3巻）[10]

(14) は、「どうして、男が入ってきた時に、大声で、泣き声をお立てにならなかったのか。気軽にうつぶせになっておられるなんて。」と訳され、入内前に、宰相中将との

密通を起こしてしまった今姫君の在り方を激しく責める母君が描写されている部分である。この「ひれ臥す」今姫君の在り方は、幼さの象徴であり、このような在り方こそが「かえって清新な魅力を感じさせる」(「新全集」p.67) ものとして男に働きかけている。また、この『狭衣物語』の場面は『源氏物語』の、「柏木の目に映った女三の宮の面影がある」とも指摘されており[11]、女君の未熟な在り方とその後の悲劇の共通性が見いだせる。また、女君の「ひれふす」姿とは、母君に叱られる最大の要因となった行動であり、女君が自身の入内前という状況にも関わらず、男に対し何も行動を起こせなかったことを示すものである。

また、以下の例に注目する。

(15)気高う恥づかしげなるさまなども、さらにこと人とも思ひわきがたきを、なほ、限りなく昔より思ひしめきこえてし心の思ひなしにや、さまことにいみじうねびまさりたまひにけるかなとたぐひなくおぼえたまふに、心まどひして、やをら御帳の内にかかづらひ入りて、御衣の褄をひき鳴らしたまふ、けはひしるくさと匂ひたるに、あさましうむくつけう思されて、やがてひれ伏したまへり。見だに向きたまへかしと心やましうつらうて、ひき寄せたまへるに、御衣をすべしおきてゐざり退きたまふに　　　　(『源氏物語』賢木)

(15) は、源氏が藤壺との逢瀬を遂げる場面で、忍び込んだ源氏の気配に驚き、身の毛のよだつような緊迫感に襲われた藤壺の様子を描いており、ここでの「ひれ伏す」は、「そのままうつぶしておしまいになる。」(新全集) と訳される。ここで注目するのは、藤壺が「ひれ伏し」た後の源氏の行動である。源氏は、藤壺の衣服を捉え、自身に引き寄せるという大胆な行動を起こしている。それに対し藤壺は「御衣をすべしおきてゐざり退く」ことで源氏に対し拒否を示すけれども、「ひれふし」た行為は、むしろ源氏の藤壺に対する強引な恋情を強めるよう働きかけているのである。

よって、女君の「ひれふす」動作は、男の侵入に対し逃れられずにその場で委縮し、むしろ相手に踏み込む動機を与える無抵抗な動作である。これを〈他者服従型〉の動作と呼ぶことにする。

5 〈～ふす〉系語彙の表現効果

以上を踏まえ、中古和文における女君の「ふす」「うつぶす」「ひれふす」の用法の違いを以下の表に示す。(記号は該当する程度を表し、文脈と用例数から顕著な特徴が認められる場合を◎とし、以下○＞△＞×の順とした。)

表：中古和文における「ふす」「うつぶす」「ひれふす」の意味分析

語＼観点	自己帰結	相手への恐怖	他者への抵抗	相手からの圧力	他者服従
「ふ　す」	◎	△	×	×	×
「うつぶす」	○	△	◎	△	×
「ひれふす」	○	○	×	○	◎

このように、「ふす」を基調としながら、「うつ―」「ひれ―」という語基(12)との複合により、〈自己帰結型〉の動作に留まらず、相手に対する恐怖を増幅させ、前項の差異によって〈他者抵抗型〉や〈他者服従型〉といった様々な状態を示す語として意味が付加されていることが分かった。また、特に『源氏物語』において複合動詞が多く使用された要因の一つには、このような動作動詞と心情との強い繋がりがあり、登場人物の複雑な心情的側面を増幅させる手段として、動詞の複合化が効果的に用いられたと考えられる。

6　「すべる」と「ゐざる」―逃げる描写

続いて、以上で取り上げた「女君が男に侵入される場面」における「ふす」複合語のような、特徴的な動詞が他にもみられるか調査し、新たな可能性を探りたい。そこで、「ひれふす」で取り上げた（15）『源氏物語』賢木の例を今一度確認すると、藤壺の「ひれ伏す」後の行動として、「御衣をすべしおきてゐざり退く」ことが描かれている。本節ではここに着目して、他動詞「すべす」の自動詞形である「すべる」と「ゐざる」の複合語を対象に、中古和文の用例を調査し、その表現効果を考察する。

6.1　「すべる」―危険回避型

「すべる」の中古における一般的意味は、「物の上をなめらかに移り動く。物と物との間をするりと通る。そっと座をはずす。退出する。」（『日本国語大辞典』）や、「静かな動作で移動する。」（『角川古語大辞典』）のような、なめらかに場所を移動する動作とされている。そして、（15）のような「男が女君の元へ侵入する場面」においては、男性の「すべり入る」が確認でき、自然に手際よく女君の元へ侵入する行為として用いられている。このような「すべる」を語構成要素とする複合動詞は様々ある(13)が、本稿では特に多くの用例数を確認できる女君の「すべり出づ」に着目する。

(16)若き人は何心なくいとようまどろみたるべし。かかるけはひのいとかうばしく

うち匂ふに、顔をもたげたるに、ひとへうちかけたる几帳の隙間に、暗けれど、うちみじろき寄るけはひいとしるし。あさましくおぼえて、ともかくも思ひ分かれず、やをら起き出でて、生絹なる単衣をひとつ着てすべり出でにけり。

（『源氏物語』空蝉）

(17)（玉鬘は、）いとわりなくて、ことつけても這ひ入りたまひぬべき御心ばへなれば、とざまかうざまにわびしければ、すべり出でて、母屋の際なる御几帳のもとに、かたはら臥したまへる。（『源氏物語』蛍）

(18)（寝覚の上は、）御供の人々の聞くらむほども、いとわりなく苦しきに、きこえさせむかたなけれど、ただ、疾くのがれ出でなむとおぼすに、心をのべて、

雲居にはおよばざりける身を知ればしばしもすむに影ぞまばゆき

言ひも果てぬやうにて、せめて、すべり出でたまひぬる名残、とばかり見送らせたまひて、（『夜の寝覚』3巻）

(16) は、源氏の気配に気づいた空蝉が、源氏に見つかる前に素早く起き上がり、単衣を着て抜け出す様子が描かれる。(17) の玉鬘は、「とざまかうざまにわびしけれ」への注釈（「新全集」p.199）に「このまま居れば源氏が入りこみそうであり、出てゆけば蛍宮に応対しなければならないし」と記される通り、困り果てながらも、源氏が部屋に侵入する可能性を危惧しており、先にそっと抜け出している。(18) は、帝を拒み続けた寝覚の上が、「お供の人も聞いているだろう」と案じて、いちはやく会話を切り上げてこの場から逃げ出そうとする場で用いられている。このように、「すべり出づ」は、相手の気配やその場の様子などから、自身の置かれた状況を察知してすぐさま積極的に逃げ出す行動であり、本稿ではこれを〈危険回避型〉と呼ぶことにする。

6.2 「ゐざる」―煩悶保持退出型

「ゐざる」の意味は一般に「すわったままで移動する。膝行する。」（『日本国語大辞典』）だが、『源氏物語事典』には「ゐざる」の語法に関する言及があり、「単独で用いられることはなく『出づ』『入る』『寄る』『しぞく』『退く』などの語を伴って複合語として使用され、35例ある。」と述べられている。

6.2.1 「ゐざり出づ」

前項で取り上げた「すべり出づ」と対比させ、「女君が男に侵入される場」における「ゐざり出づ」を以下に示す。

(19)（父、右大臣が突然御簾の中に入って来て）尚侍の君いとわびしう思されて、

やをらゐざり出でたまふに、面のいたう赤みたるを、なほなやましう思さるるにやと見たまひて　（『源氏物語』賢木）

(20) あさましうて見返りたるに、宮はいとむくつけうなりたまうて、北の御障子の外にゐざり出でさせたまふを、いとようたどりて、ひきとどめたてまつりつ。　（『源氏物語』夕霧）

(19) は、源氏と密会中の朧月夜の所に父親がやって来るという絶体絶命の状況で、父大臣の視線を御簾の内からはずすために、朧月夜が自分から外に出る様を表す。「ゐざり出づ」は、修飾語に「やをら」とあるように、「すべり出づ」のような俊敏に逃げ出す動作ではなく、御簾の中に潜む源氏を気にかけた動作と考えられる。(20) は、夕霧の侵入に対し落葉の宮が襖の外に出ようとする様子を表す。この場面には、「新全集」(2巻p.404) が「宮は、柏木の冷淡さを嘆いていただけに、夕霧の心寄せには、喜びも感じたであろう。しかし今、露骨な求愛に接すると、人目・世間体へのはばかりが優先して心を閉ざすほかない。」と注するような背景があり、「ゐざり出づ」という動作の中には拒否の姿勢と夕霧への複雑な心情が読み取れるのである。

6.2.2 「ゐざり退く」

最後に、「女君が男に侵入される場」における女房の「ゐざり退く」を確認しておこう。

(21) 我が供なる人は、さし離れて、もののおぼえざりつるままに、宣旨の君の唐衣の袖ばかりをひかへたりつるも、いとかたはらいたかりければ、心苦しくいとほしく思ふ思ふ、脱ぎやりて、御几帳の後ろに、ゐざり退きにたり。　（『夜の寝覚』巻3）

(21) は、帝に侵入された寝覚の上が、女房（宣旨の君）に助けを求めるが、女房は気の毒には思いながらも、几帳の後ろに下がってしまうという場面であり、この「ゐざり退」いた女房は、女君を目の前で見放すことに心残りを覚えている。

これを踏まえると、(15)『源氏物語』賢木では、藤壺は源氏の元から「ゐざり退く」とき、どのような心情を抱えていたと考えられるだろうか。「ゐざり退く」藤壺に対して源氏が恨み言を言った際、『細流抄』は「藤壺の耳にとまる事もまじるなるべし」と、藤壺の心を推測している。すぐさま逃げ出して危険を回避する「すべり出づ」ではなく、藤壺の「ゐざり退く」という動作には、源氏に対する因縁を抱えた心情が表出している。恋の場において女性が「ゐざり出づ」、「ゐざり退く」とき、「すべり出づ」とは異なる、心に咎められるものや気にかかるものを抱え思い煩う心情が存在すると考えられる。このような動作の表現を本稿では〈煩悶保持退出型〉と位置づける。

7　おわりに

本稿では、「女君が男に侵入される場」における女君の動作としての複合語を調査し、その表現効果を考察した。自身の境遇を嘆く〈自己帰結型〉の「ふす」を基調とし、それが「うつ―」「ひれ―」と結合することで、心情表現が増幅する。「うつぶす」が男君に対する〈他者抵抗型〉、「ひれふす」が〈他者服従型〉を示すように、限定的な意味で用いられることが明らかとなった。また、「すべる」の複合語は行動の手際の良さを含み、自身の中で思いを巡らせ、最適な行動としてその場から逃げ出したり、侵入したりすることを表す。女君の「すべり出づ」は、〈危険回避型〉の動作として働き、男の侵入後の目的を妨げている。さらに、「ゐざり出づ」「ゐざり退く」は、その場に気にかかるものがありながら、あえてその場を離れなければならない複雑な状態におかれた〈煩悶保持退出型〉と考えられる。「ゐざる」女君について針本正行（2002）「『源氏物語』の表現―「ゐざる」を中心として―」では、

「ゐざる」女君とのことは、禁忌の恋であったのである。（略）「ゐざる」は日常の高貴な女君の所作であり、室内での生活的な行動である。その日常生活があえて物語世界で語られたときに、光源氏は日常世界にある「ゐざる」女君を侵犯し、そのために日常世界から疎外されていくこととなるのである。「ゐざる」女君は、禁忌を侵犯し、朱雀帝の王権を侵していくという光源氏の本性を現実化させていくのである。

と述べられている。「ゐざる」女君には、禁忌を犯す窮地に立たされた女性の〈煩悶〉の心情が色濃く表出されるのではないだろうか。

以上のように、「はじめに」で取り上げた「ひれふす」を「身体を折って逃れようとする」動作であるとする中川説には異論の余地があろう。これら「すべり出づ」「ゐざり出づ」「ゐざり退く」の語の女君の積極性を捉えた時、「ひれふす」女君の行動は、消極性がより際立つ。「ひれふす」は、男の侵入に対し逃れられずにその場で委縮し、むしろ相手に踏み込む動機を与える無抵抗な動作といえる。このように、女君の動作としての複合動詞には心情が強く含まれ、物語の展開を左右する。複合動詞を単なる動作として解するのではなく、重要な心情語としてとらえることができよう。

中古における四段活用「ふす」の複合語の異なり語数は、『平安時代複合動詞索引』によると92である。動詞「ふす」や、その他の動詞が何と複合するのかをさらに調査し、動作動詞における心情の表出に着目することで、中古和文における複合動詞の表現効果について明らかにしていきたい。

【註】

（1） 安藤徹（2008）「複合動詞化する『源氏物語』」は、「『源氏物語』における動詞のうち、その半数以上が複合動詞である。さらに、平安朝の他のテクストには見られない『源氏物語』独自の複合動詞の数（異なり語数）は1200語程度あり、それは『源氏物語』の複合動詞全体の3分の1近くにあたる。平安朝テクスト全体の複合動詞の総異なり数は約12000語程度であるから、その約10分の1を『源氏物語』固有の表現が占めていることにもなる。」と指摘する。

（2） 引用本文は、「新編日本古典文学全集」による。

（3） 3語とも辞書類では「うつぶせになる」「うつむく」「寝る」といった語釈がなされ、意味の違いは必ずしも明確でない。

（4） 文体研究の有効な方法の一つとして木原茂（1967）「文体論の方法―部屋描写の場合―」のように、共通する場面や状況下の描写を比較するものがある。

（5） 『角川古語大辞典』による。上代や中古前半では「うつぶす、うつむく、潜む、寝る」といった幅広い意味の用例があるが、中古半ばから中世には、「うつぶす、うつむく、寝る」動作に限定されて行く。そして中古物語では、特に心情表現としての用法を拡大させたと考えられる。近世では「休む、寝る」意が多くなる。

（6） 底本は深川本により、内閣文庫本、飛鳥井雅章筆本、蓮空本、伝為明本、伝為家本、伝慈鎮本などと校合して作成された本文を用いた。本文は第1系統によるもので、第1系統が狭衣の心情吐露についての記述が一番長く、他系統では省略されている物も見られるが、本稿では第1系統の本文を採用する。

（7） 『角川古語大辞典』による。「うつぶす」は、『竹取物語』など中古からその用例がみられ、管見の限りいずれも顔を下に「うつむく」動作として用いられている。中世からは徐々にその用法が拡大し、涙を伴って嘆いたり、状態を前に倒したりする動作として用いられる。

（8） 筆者の探し得た範囲の中古9、中世14、近世14の例を考察の対象とする。

（9） 宿命に対する悲しみを要因として「ひれふす」用例は、中古が9例中1例に留まるのに対し、中世では14例中7例確認できる。

（10） 第1系統と第3系統は似通うものの、第2系統には異同がみられ、「ひれ臥し」の箇所は「同じさまにて殿のうちにも交じらひはべるまじ。さても、まどか入り来つらん折、声高にのたまはざりつらん。心やすく入り臥したまひつらんことよ。」となっている。

（11） 「新全集」3巻p.64注釈。

(12) 語源には諸説あるが、「ひれ」は、『日本国語大辞典』において動詞に「ひたすら」の意を添える接頭語「平」が挙げられている。また、松本克己（1995）『古代日本語母音音論—上代特殊仮名遣の再解釈』では、母音交替における「pira〔平・枚〕～pire〔領巾〕」の派生があげられており、上代から存在する語である「領巾（ヒレ）」との関連性が考えられる。「うつ」は、『角川古語大辞典』において「うつ」は内の意かと指摘されている。

(13) 『平安時代複合動詞索引』によると、「すべる」を前項にとるものには、「—いづ」「—いる」「—うす」「—おる」「—かくる」「—とどまる」「—とまる」「—のく」「—まかづ」「—まかりいづ」「—よる」がある。

【参考文献】

- 安藤徹（2008）「複合動詞化する『源氏物語』」紫式部学会編『源氏物語と文学思想：研究と資料』武蔵野書院
- 木原茂（1967）「文体論の方法—部屋描写の場合—」『広島女子大学紀要』2
- 金田一春彦他編（1979）『学研国語大辞典』学習研究社
- 狭衣物語研究会（1999）『狭衣物語全注釈』おうふう
- 中川正美（2019）「『臥す』の文学史：源氏物語以前」『梅花女子大学文化表現学部紀要』15
- 中川正美（2020）「『臥す』人々：日常の文学的形象」『梅花女子大学文化表現学部紀要』16
- 林田孝和他編（2002）『源氏物語事典』大和書房
- 針本正行（2002）「『源氏物語』の表現—「ゐざる」を中心として—」『伝統と創造の人文科学』國學院大學大学院
- 東辻保和他編（2003）『平安時代複合動詞索引』清文堂出版
- 松本克己（1995）『古代日本語母音論—上代特殊仮名遣の再解釈』ひつじ書房
- 宮嶋達夫（1971）『古典対照語い表』笠間書院

【参考テキスト】

- 阿部秋生他校注（1998）『源氏物語』新編日本古典文学全集　小学館＝「新全集」
- 柳井滋他校注（1993）『源氏物語』新日本古典文学大系　岩波書店＝「新大系」
- 伊井春樹編（1980）『細流抄　内閣文庫本』源氏物語古注集成　第七巻　おうふう